

2013年10月24日

サイエンティフィック・システム研究会
合同分科会 2013年度会合資料

境界を越えていく “イマドキ”の若者たち



伊藤哲司

茨城大学人文学部
社会心理学／ベトナム文化研究

自己紹介



- ・ 1964年(昭和39年)愛知県名古屋生まれ。名古屋大学文学部卒業、同大学院文学研究科(心理学専攻)を満期退学。
- ・ 1993年に茨城大学人文学部講師に。自然科学的な研究の枠を抜け出して、人間科学的なフィールドワークに傾倒。1998年頃、ベトナムハノイでの在外研究に従事。帰国後に『ハノイの路地のエスノグラフィー: 関わりながら識る異文化の生活世界』(ナカニシヤ出版)を出版
- ・ 現在は、茨城大学人文学部教授。2011年3月11日茨城県水戸市で被災し、被災地のフィールドワークも展開中



往復書簡

学校を語りなおす

「学び、遊び、逸れていく」ために

伊藤 哲司 ✉ 山崎 一希



「学校」って何なのだろう？

—— 少し視点をズラしてみれば、
「学校」はもっとおもしろくなる！

新曜社

伊藤 哲司・山崎 一希 2009
『往復書簡・学校を語りなおす：「学び、遊び、逸れていく」ために』 新曜社

山崎一希さんから伊藤哲司へ



「自分たちの学力は低下している」「ゆとり教育が学力低下を引き起こした」「公立学校が危ない」.....そのことをあらかじめ「知っている」子どもたちを前に、教師は授業をつくり、学力を上げを求めるられます。よく考えると、これはなかなか過酷な話です。実際僕自身も、学生時代に講師アルバイトをしていた学習塾で、小学五年生の生徒に「オレらって学力低下なんですよ？」と言われたことがありました。

伊藤哲司から山崎一希さんへ



学生時代の塾講師のバイト中に、小学五年生の生徒から「**オレらって学力低下なんですよ？**」と言われたというエピソード、なかなか強烈ですね。「学力低下」が受験等との関係では切実でリアルな問題に感じられたとしても、山崎さんが言うとおり、「自分たちの学力が先輩たちよりも低下しているということ」を実感するのは、おそらくかなり難しく、むしろ学校外からの情報によってそれが作られているというのはよくわかります。

再び、山崎さんから伊藤へ



実は「ゆとり教育」には、「学び」を学校から解放する目的もあったと思うんです。つまり、学びの場を学校に限定せず、休日などに地域や家庭でも学ぶことにより、社会的に学力を育むことが期待されていたのです。それまでは、学校のオン／オフとがあまり対応しすぎていた。それをラディカルに解決しようと考えたのではないのでしょうか。（中略）「学び」を学校から解放する——個人的にはとても共感できるコンセプトです。ところが、この試みは残念ながら成功しませんでした。

再び、伊藤から山崎さんへ



「ゆとり教育」についての鋭い分析、考えさせられるところ多々ありました。「ゆとり教育」の導入によって、「**学び**」を**学校から解放**し、いわば「**学校の社会化**」が目指されていたというのは、本当にその通りだったのだらうと思いました。とすればなおさら「ゆとり教育」の導入は、一種の社会実験であり、それが教育政策の大きな転換であったからこそ、導入直後には多少の齟齬が生じたりするのは当然なのだらうと思います。しかし、その結果が十分検証されないまま「**脱ゆとり教育**」に再び急転換してしまいました。

「ゆとり世代」とは

- ・ 小中学校において2002年度に施行された学習指導要領（いわゆる「ゆとり教育」）で育った世代。1987年（昭和62年）～2004年（平成16年）生まれ（諸説あり）。
- ・ いわゆる「現役」で入学した現在の大学生たちは、おおむね1991年（平成3年）～1994年（平成6年）生まれ。まさに「ゆとり世代」の中心。
- ・ 「情報化社会の急速な発展の中で成長した世代で、幼少期にはポケットベルやPHSが登場し、学齢期には携帯電話の普及率が上昇、飽和化し、インターネットも爆発的な発展をとげ、メールをはじめmixi、twitter、Facebookに代表されるSNSやソーシャルネットワークがコミュニケーションツールとして完全に定着した。通信端末の所持が不可欠な世代である」
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/ゆとり世代>)

参考：「〇〇世代」あれこれ

- ・ 世の中に大きな影響を与えている「団塊の世代」
1947年から1949年生まれ
- ・ 好景気に沸いた「バブル世代」
1965年から1969年生まれ
- ・ 就職氷河期を体験「団塊ジュニア世代」
1971年から1974年生まれ
- ・ 激動の思春期時代を経験「氷河期世代」
1970年から1982年生まれ
- ・ 情報のやり取りが欠かせない「ゆとり世代」
1987年から2004年生まれ
- ・ 草食系の「さとり世代」
2005年以降の生まれ

(<http://news.mynavi.jp/news/2013/07/31/134/>)

2002年度から導入された
道徳の補助教材「心のノート」





むねを はって いこう



- まい日^{にち}を きもちよく
- しっかり やろう
- ゆう気^きを たして
- あかるい きもちで

うつくしい ところを

ととろと ところを むすぼう



- げん気^きに あいさつ
- あたたかい ところで
- ともだちと なかよく
- ありがとうが いっぱい



いのちに ふれよう



- しぜんと なかよく
- いのち きらきら
- うつくしいものを かんじて

そだてよう

みんなと きもちよく いよう



- みんなの ものを だい^{たい}せつに
- かぞくって いいね
- 学校^{がっこう} だい^{だい}すき
- わたしを そだてる まち

心の姿勢

街中で

大きな硝子窓に映った自分に気づいた。
いつもまっすぐ胸を張って歩いているつもりなのに
なんだか
自信なさげにうつむきかげんに歩く私がそこにいた。

髪型や服装、スタイルばかりが気になっていたけれど
自分の中身は、ぜんぜん気にもしなかった。
——でも、この硝子窓には、私の心が映っているよう。

いろいろなことがある毎日。
悩みがあって、やるべきことがあって、そして避けたいこともある。
しかし、いつまでも避け続けるわけにはいかない。
心はもっと前向きであるべきなのに
知らず知らずに、心の姿勢が悪くなってしまったのだろうか。



いろいろなことがある毎日。
いろいろなことを考え
いやになってしまっている自分。
家族とのこと、学校のこと、友達のこと
そして自分自身のこと。
でも一回しかない人生なのだから
正面からぶつかって
自分で判断していかなければならない。



何か大きな力はないだろうか。

夢と希望、そして勇気が湧いてくるような——

もう一度、硝子窓に映った自分を見る。
そして「心の姿勢」について考える。

「いまからのわたし」を

人間には、自分の弱さや醜さを克服する強さや気高さがある。自分を奮い立たせて、人間として生きることの喜びを見出していこう。もしかしたらこの詩に、ヒントがあるかもしれない。

わたし

「変わったね」

むかしの友達に言われるたび、うれしくなるわたし

「いままでのわたし」は、いつも楽な方へ流され

わがままで友達の数も少なかった

「これじゃいけない」

そう思ったのは、6年生のとき



わたしは、少しずつ変身していくことを決心した
中学に進学することによって
わたしの心も考えも
困難をひとつひとつ乗り越えていこうと誓った
たくさんの人に会い
たくさんの考えや生き方を知り
たくさんの悩みをかかえて一年が過ぎ
「いまのわたし」がいる
「いまのわたし」は、まだ完全じゃない
時々、「いままでのわたし」が顔を出す
そんなとき、「いまのわたし」が顔をひっこめる
少し後悔しながら…

これからはもっとたくさんの人と出会い
もっとたくさんの考えや生き方を知り
もっとたくさんの悩みをかかえながら
困難を乗り越え、生きる喜びを感じたい
そして、わたしのまわりにいる人に感謝しながら
「いまからのわたし」を育てていきたい

(中2 生徒作文)



育てていきたい

良心の
声を聞こう

良心に恥じない
誇りある生き方

空欄にどのようなことが入るか考えてみよう。



生きがいや
生きる喜びについて
考えてみよう



■人々はどのような生きがいを胸に毎日の生活を送っているのだろう。
■周囲の人にインタビューしながら、自分自身の生きる参考にしていこう。

インタビュー	あなたが感じたこと、考えたこと
さんの生きがい	
さんの生きがい	

あなたが目指す
生き方とは

“イマドキ”の若者たち



- ・ 「**私たちは『ゆとり世代』**と呼ばれますけど、先生はどう私たちを見ているんでしょうか？」と尋ねる学生
- ・ 学生たちのある集まりでの自己紹介、「僕は**人見知り**で」「私も**人見知り**で」……「でも仲良くしてください」と話す学生たち
- ・ たしかにコミュニケーションがちょっと苦手に見える若者たちは少なくない。**「何をしたらいいかわからない。でも何かをしたい」**という声もよく聞く。でも彼ら彼女らは本当に**「学力低下のゆとり世代」**のステレオタイプに当てはまるのだろうか？

ステレオタイプとは



- ・ 型にはまった紋切り型のモノの見方。たとえば「アメリカ人」と言えば浮かんでくる特定のイメージがあるが、それが**ステレオタイプ**の例
- ・ ステレオタイプのなかでも、ネガティブでかつ事実と明らかに異なるものは**偏見**と呼ばれる。さらにその偏見に基づく行動は、しばしば**差別**と呼ばれるものになる。
- ・ ステレオタイプをもつことによって、相手の認知の軽減が図れ、コミュニケーションを円滑にする可能性はある。**しかし「色眼鏡」となれば、弊害も大きい。**

「“イマドキ”の若者たちは……」と、 つついっい呟きたくなる心理



- ・ 古代から連綿と続けられてきた言い方。おそらく、いつの時代にも、またどこの文化・社会でも、言われてきたこと。
- ・ 若い世代の人たちを自分たちの世代とは異質で理解しがたいと言うのは、自分たちの世代のほうが優れている(優れていた)と思い込みたくないからではないか。
- ・ もし若い世代の人たちが、本当に上の世代よりも劣っているとしたならば、世界とつくにダメになっていたはず。

2011 年度
ベトナム学生交流の旅
報告書

2012 年 3 月 13 日～22 日



茨城大学

茨城大学における「ベトナム学生交流の旅」

- ・ 2001年から毎春実施。参加者は学内で公募。毎回十数名の学生が参加。圧倒的に女子学生が多い。
- ・ まだ行くか行かないか迷っている学生たち、そんな学生には、「迷っているなら行こう。今までベトナムに行って後悔した学生は、私が知る限りない」と背中を押してきた。
- ・ 参加学生のなかから10人を超える学生がベトナムの留学へ。うち2人は、卒業後にベトナム人女性と結婚。
- ・ 2011年3月は、東日本大震災の影響を受け中止。その後、ベトナム語短期語学研修というかたちに変えて継続中。「一皮むける」学生たちに寄りそい、見つめてきた。

ベトナムの旅に参加した学生の感想（１）

私にとってとくに印象的だった出会いは、なんといってもフエ外国語大学の学生たちとの出会いでした。学生はみなとても気さくで笑顔が素敵な方ばかりで、そんな彼らと一緒にいるうちに、しだいに自分の気持ちもほどけていくのを感じました。交流会での思い出はもちろんですが、お昼を食べた後にバイクの後ろに乗って連れて行ってもらった海での思い出は、一生忘れません。海に着いたあと、私は靴を脱ぐみんなにつられるようにして裸足になりました。海岸で自分たちを追ってくる波に大はしゃぎしたり、ミニゲームに全力で挑んだり……。**いったい、こんなに全力で遊んだのはいつ振りだろうと思うほど、普段の自分とは違う開放的な自分がいました。**いつもだと、「冷静にならなきゃ」となかなかはめを外せない自分ですが、この時は、そんな開放的な自分を心地よく感じていました。

ベトナムの旅に参加した学生の感想（２）

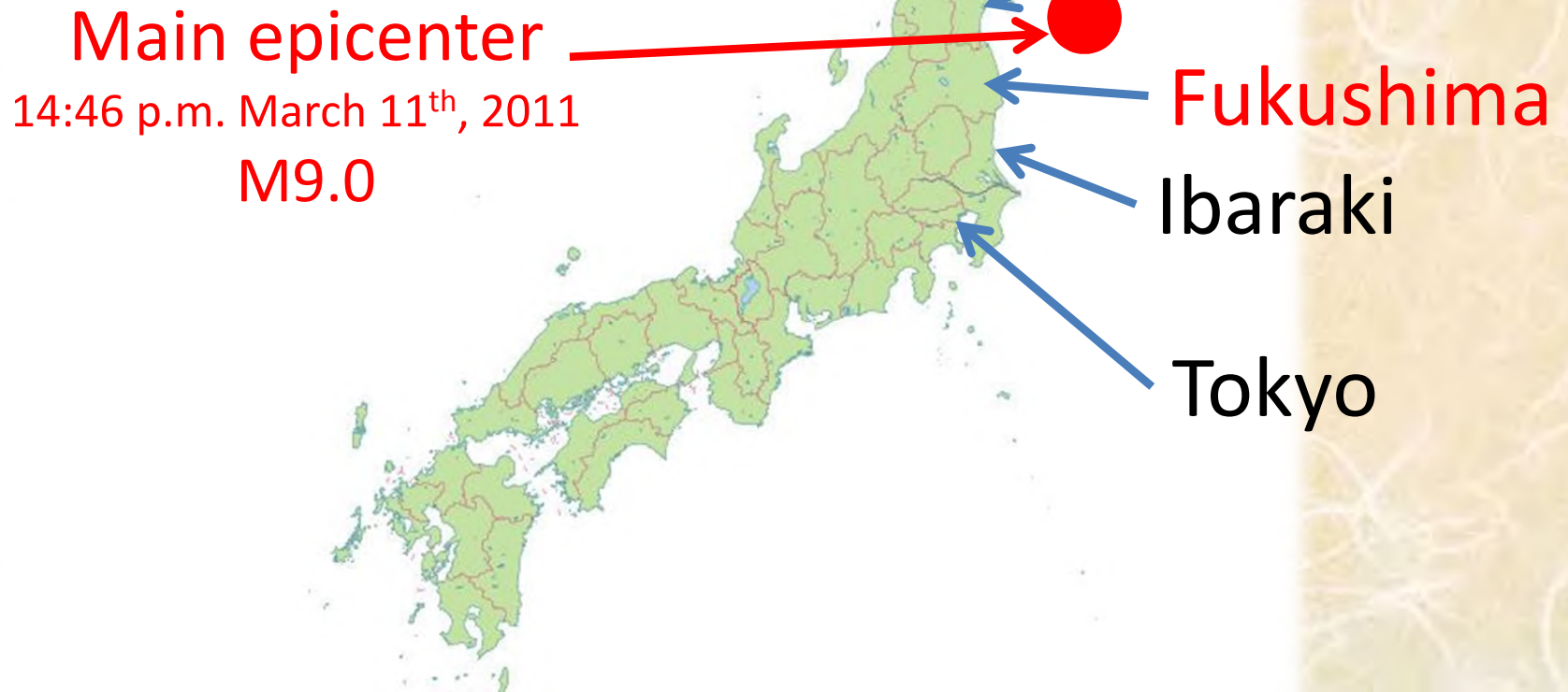
今の日本はもう単なる大量生産がもてはやされる時代ではないけれど、昔の日本もこうだったのかなと考える機会を与えてくれました。ホンダ製のバイクの多さは、**日本とベトナムのつながりを考えるきっかけ**にもなりました。フエで海に行ったときにみえた田園風景、街中では見られない家、物売りの少年などはまだまだベトナム全土が豊かな国ではないことを痛感させられるきっかけでした。ホーチミンでは「あれ？東京に帰って来たんだっけ？」という錯覚を起こさせるようなビル群。工事中の建物の多さはこの街が未完成であることを教えてくれました。**フエ外大の学生の少しはにかみながら自分の夢を嬉しそうに語る姿**は、日本の夢を持った学生たちの姿と重なるものがありました。

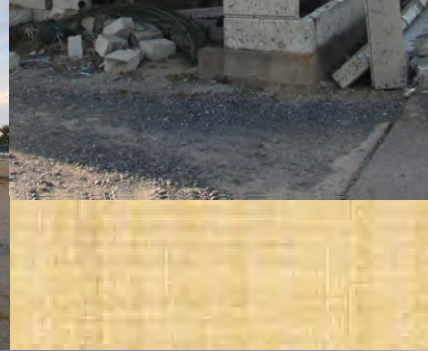
ベトナムの旅に参加した学生の感想（３）

今回の旅で、自分がどう変わったのか、どう変わっていくのかは、今のところわたしにはわかりません。でも、この旅でしか知ることができなかったこと、感じることはできなかったことを、わたしは体験できたと思っています。以前までは頭のなかで考えているだけでなかなか踏み出せなかった一歩を、思い切って踏み出してみることで、こんなにもたくさんの新しいものごとやひとに出会えるのだと、改めて感じることができました。だから、この旅で出会えたたくさんの素敵な思い出と人々のことやそれらへの感謝を忘れないことが、わたしがこの旅で体験したことを今後活かしていく原点になると思います。

2011年3月11日 14時46分 東日本大震災発生！

Map of Japan






震災後に立ち上がった 社会的ネットワーク「大洗応援隊！」

学生がつくったプレゼンより





大洗 応援隊！

団体紹介
活動紹介

大洗応援隊とは？

- 2011年3月11日の震災を受け、立ち上げられた学生だけでなく社会人も中心となった社会的ネットワーク
- 県内外を問わず、年代も活躍するフィールドも異なる様々なひとたちによって構成されている
- 4月現在、隊員数はおよそ100名
- SNSのfacebookによってつながっている

大洗応援隊！

（防災） × （街づくり）
からの復興支援

活動内容①

○ほげほげカフェ



- 昨年10月から空き店舗を利用してスタート
- 毎週土曜日に営業
- 飲み物などを提供
- 地域住民の交流の場を目指している
 - ex) カフェ内でイベントを企画
- 商店街のイベント時には休憩所として活用

活動内容②

○大洗町のイベント補助



活動内容②

○大洗応援隊のイベント



これから・・・

- 「声聞き隊！」の活動
- 大洗住民のみなさんのところに直接足を運び、「今、思うこと。未来へ、願うこと」を聞いて回る、ヒアリングを行いました



- 地域住民との交流をしつつ、震災の経験を風化させないような活動も行っています

大学生だからこそできること..
‘現在’だからこそできること..
物事の大小は関係ありません

応援隊の一員としてあなたが
できることをやってみませんか？



境界を越えていく若者たち



宮城県松島市への災害ボランティアバスツアーを毎月企画している
4年生の先輩の話に耳を傾ける1年生たち(伊藤の講義の一コマ)



宮城県東松島市
(2013年7月)



境界を越えていく若者たち

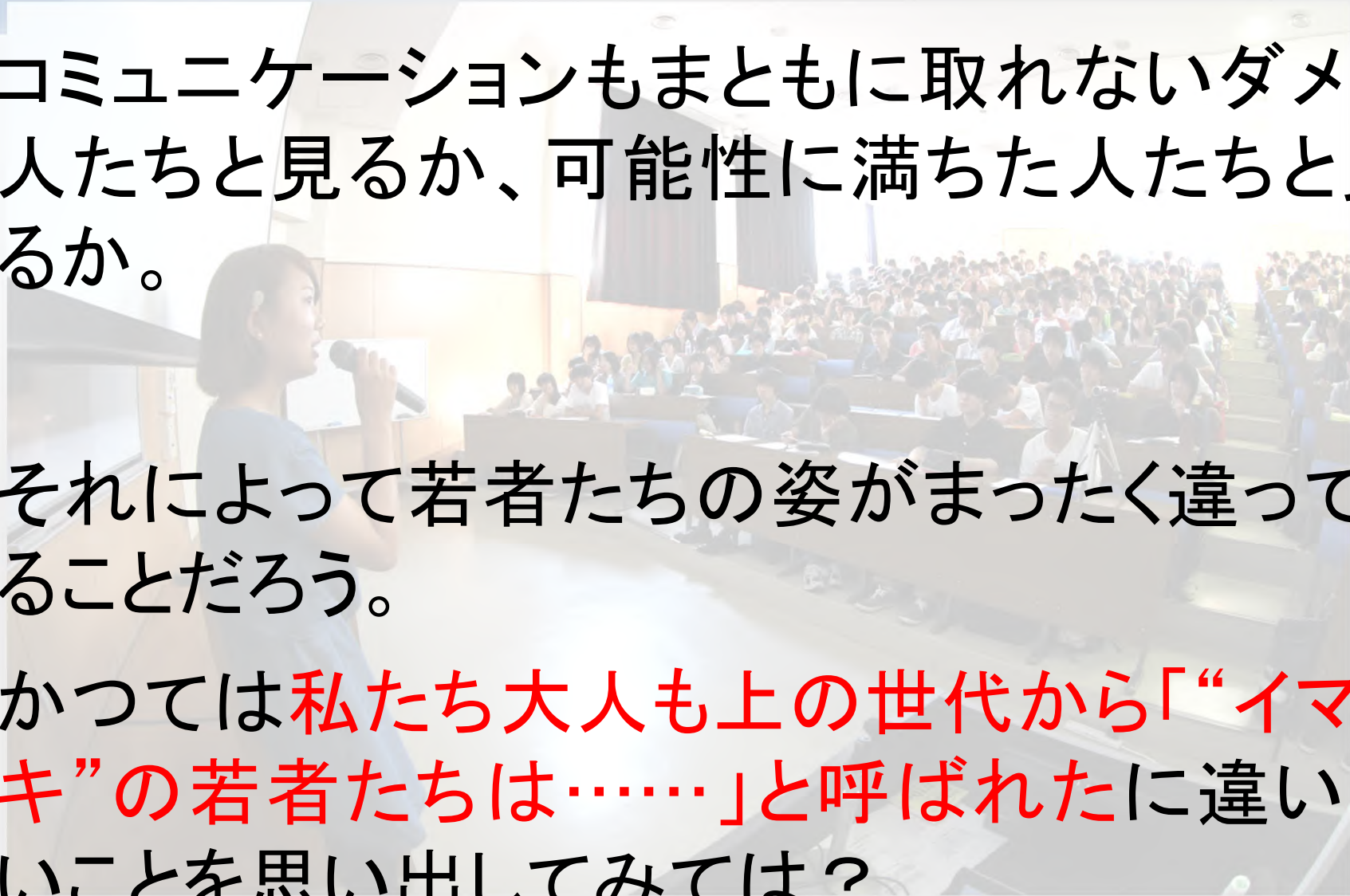


- ・ 「境界」——それは、私たち自身を外部から守るためのものでもある。その内側にいれば、**とりあえずの安全**が確保できる。
- ・ したがって、そこを越えていくということは、ときにとっても不安をかきたてられ、あるいは危険にさらされることにすらなる。**当然リスクを伴う。**
- ・ しかし、自分自身が何重にも築いてきてしまった**境界を思い切って越えてみなければ**、新しい出会いもなければ、新しいことも始まらない。“**イマドキ**”の若者たちも、そのことには気づいている。

“イマドキ”の若者たちをどう見るか



- ・ コミュニケーションもまともに取れないダメな人たちと見るか、可能性に満ちた人たちと見るか。
- ・ それによって若者たちの姿がまったく違ってくることがだろう。
- ・ かつては**私たち大人も上の世代から「“イマドキ”の若者たちは……」と呼ばれたに違いないことを思い出してみては？**



ご静聴
ありがとうございました。



伊藤哲司

tetsuji64@yahoo.co.jp

Twitter: @tetsuji64

Facebookは実名で